様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　５月　１日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2007～2008
課題番号：19720029
研究課題名（和文）　フリードリヒ・ニーチェにおける「芸術の生理学」

研究課題名（英文）　"physiology of art" in Friedrich Nietzsche

研究代表者
山本　恵子（YAMAMOTO, Keiko）
早稲田大学・文学学術院・助教
研究者番号：70434248

研究成果の概要：
2007 年度には、ニーチェにおける初期・中期・後期の生理学的考察を概念史的に検討することによって、当時の生理学者との関係に関する研究の骨子を示した。その結果、ニーチェにおける生理学という概念装置の意味が著作時期によって大きく異なることが明らかとなった。2008 年度には、「健康」や「無意識」等の諸概念に着目した。そこでは、健康を画一的なものと捉える見方が人間の平等というドグマに侵されたものとして積極的に否定されるニーチェの思索が確認された。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	700,000	0	700,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,200,000	150,000	1,350,000

研究分野：美学・美術史
科研費の分科・細目：美学・美術史
キーワード：美学、西洋哲学、生理学、芸術

１．研究開始当初の背景

ジョナサン・クレーリーの言を待つまでもなく、19 世紀の生理学が身体に関する知を刷新した画期的な学問だったことは言うまでもない。18 世紀的な「旧体制の権力や農産的、職人的な生産体制、家政的・大家族的構造」の崩壊に際し、分散した個を制御する新たな統制のメカニズムが考案されなければならなかった。人間諸科学の技術的向上は、主体の行動の＜正常さ＞を学問的に計算可能なものとし、その＜正常さ＞が規範となるようなある種の統制を遂行可能にした。その意味において、生理学とはまさに主体を管理するために、新たに編み出された人間諸科学の 1 つだったとされるわけである。むろんこのような筋書きのすべてを承認するわけではないにせよ、生理学の興隆がニーチェの芸術の生理学に確実に反映され、ニーチェの自己観、身体観を転回させたことは、否定しがたい事実である。しかしながら、これまで一般に考えられていたようにではない。すなわち、い

わゆる１８世紀から１９世紀の哲学者の「生理学」なる前提からニーチェの生理学が理解され、彼の生理学においては一貫して旧来の生理学が反映されているといった主張がそれである。それゆえ、この主張の問題点を洗い出し、むしろ当時の生理学の急激な進歩とともにニーチェの「生理学」理解が変容したことを跡づける必要が生じていたのである。

２．研究の目的

本研究の目的は、次の 2 点にある。
(1)いわゆる１８世紀から１９世紀の哲学者の「生理学」なる前提からニーチェの生理学が理解され、彼の生理学においては一貫して旧来の生理学が反映されているといった主張の問題点を洗い出すこと、(2)当時の生理学の急激な進歩とともにニーチェの「生理学」理解が変容し、それにしたがって彼の「身体」と「芸術」の概念にも大きな変容が見られることを詳らかにすること、である。
なお本研究が問題とする事柄とその独自性は次の 3 点（①～③）に存する。
①まず考慮すべきなのは、なぜニーチェが芸術に「生理学」という特異な概念を用いなければならなかったのかという点についてである。確かにニーチェの生きた 19 世紀においては、生理学という学問が実験装置の技術革新により飛躍的な発展を遂げた。ニーチェは当時の生理学が問題とした、感情などの心的現象のみならず、習慣化された行動様式などをも含めたあらゆる生命現象と、身体的諸機能一般との関係性に着目する。とりわけニーチェとほぼ同時代の生理学者ヘルムホルツや哲学エドゥアルト・フォン・ハルトマンの生理学的考察がニーチェの身体観にどのような影響を与えているのかを、両者の関係から読み取る。
②ニーチェは「生理学者たち」が「自己保存衝動を、有機的生物の根本衝動として定めていること」を批判し、同時に生物の根本衝動は、自己保存衝動ではなく、「力を放出する Kraft auslassen」ことにあると述べている。他方ニーチェは、美的創造を人間に内在する力の強弱と関連させている。したがってここには、美しいものは、自己保存からではなく、力から生まれるという重要な主張が見て取れるのである。本研究がこの主張を重要とみなすのは、この主張が、あたかもわたしたちの生の根源であるようにさまざまな制度のうちに取り入れられている自己保存の欲求からだけでは、生の現状を十分に説明することができないというニーチェ思想の核心にふれたものであるからである。こうした考察をつうじて、ニーチェの主要概念である「力への意志」と芸術創造との関係を考察する。
③②のような形で美が生理学のうちに取り入れられることには、従来の美の概念から考えれば困難が伴う。一般に、美とは「感覚的なもの」であると同時に「観念的なもの」である。中世では視覚や聴覚などの身体器官が美と関わるがゆえに、美が超越概念に入るか入らないかは極めて微妙な問題であった。しかしニーチェのように、芸術を「生理学」のレベルで捉えようとすれば、今度は逆に、＜美が生理学的なもののみに還元されうる＞とすることに対しての違和感がつきまとうことになる。この観点から、いったい、「芸術の生理学」において美がどのように位置づけられるのかを改めて問う。
さらにこの問いは次のように発展することになろう。すなわち芸術が常に生理学的なもの、つまり個別的な身体の状態にかかわるものであるとするならば、「芸術の生理学」における「陶酔」の概念が、初期のそれとはかなり異なったものととらえざるをえないのではないかという問題にである。『悲劇の誕生』では、人間は仮象の世界で個別化の原理に縛られて生きている。しかし悲劇芸術にみられる陶酔という非現実的な状態においては、自己を忘却し「より高い共同体の一員」となる。そのような仕方で、人は個体化された存在者でありながら、形而上学的世界と象徴的に関係することができるとされる。しかし、後期にはこのような形而上学的世界が否定されることはよく知られるところである。それにもかかわらず陶酔が「生理学」の枠組に収められるならば、陶酔は初期のそれとは全く異なる意義をもつことになるはずであろう。そうすると、初期の陶酔のうちに認められた「自己忘却」「苦痛から生まれる歓喜」などの作用の再解釈が必要となる。特に、陶酔における、人間を脱個体化の状態へ至らしめる作用が、後期思想にどのように生かされているのかが問題となるだろう。

３．研究の方法

(1)2007 年度：初期・中期・後期、それぞれの時期に特徴的なニーチェの生理学概念を明らかにし、さらにそこにいかなる変遷が認められるかを問う。
①初期ニーチェが「生理学」という発想を得たのは、当時流行していた同時代の生理学からの影響によるものである。したがって当時の生理学者たちが、どのような問題を主に論じていたのかを知ることは、ニーチェの生理学概念を知る大きな手がかりとなるはずである。具体的には、(a)初期ニーチェに影響を与えたと推測される生理学者ヘルムホルツ等の言説を検討すること、(b)ニーチェが触れた諸著作や、彼の教育環境を調査する等の手段をつうじて、初期ニーチェの「生理

学」概念の受容の軌跡を明らかにすること、である。
②しばしば「実証主義的」であるとされるニーチェの中期思想であるが、生理学についての中期の言説は、初期のそれより格段に増加している。初期と後期とをつなぐ中期の生理学概念に着目し、この時期ニーチェが「生理学」について多く論じるようになった理由とその内容とを多角的に考察する。
③1888 年にニーチェが記したノートの中に、「芸術の生理学のために」と題された断片が存在する。ニーチェは『芸術の生理学のために』という表題の、主著の一章を計画していたが、結局ニーチェの手によって遺されたのは、それらわずかな断片と、いくつかのアフォリズムにすぎない。そのうえこの断片は、明瞭な主想による配列もなしに素材を収容した、項目の列挙にすぎず、「雑多な異質的な問題点が提出されているが、ひとつの建物の基本設計は示されず、これらすべてを組み入れるべき空間の下書きすら見当たらない」（ハイデガー）という評価を受けてきた。しかし本研究では、ニーチェがノートに断片的に遺したこの「芸術の生理学」という構想を、当時の生理学や心理学の文脈を用いて補いつつ総体的に理解することに努める。
(2)2008 年度：①生理学に関する周辺概念に考察の枠を広げ、「健康 Gesundheit」という概念について研究を行う。
②ニーチェの生理学的思索に影響を与えたエドゥアルト・フォン・ハルトマンの『無意識の哲学』における感情論の理解をさらに進める。そして内在的な理解のみからでは見えてこない初期ニーチェの生理学的諸概念の相互関係を、ハルトマン哲学を援用することによって明らかにする。

４．研究成果

(1)2007 年度
①初期から後期へと至るニーチェ思想の変遷と、初期から後期への「生理学」概念の変容との間にパラレルな関係があることを証明した。とくに、本研究費の補助により、ドイツ・ヴァイマールのゲーテ・シラー・アルヒーフに保管されているニーチェの生活記録――ニーチェの成績表やバーゼル大学勤務中の講義要項などの原本（マイクロフィルム）――を現地調査することができたことは大きい（2007 年 8 月）。これにより、ギムナジウム時代等にニーチェが受けた生理学的な影響の有無について検討することができた。なお、以上の研究成果については、『ニーチェと生理学――「芸術の生理学」構想への道――』の中で公表した。
②従来論じられることの少なかった中期著作における「生理学」の扱いについても考察を進めることができた。この問題を中心的に論じたのは、論文「「道徳の生理学」とは何か――中期ニーチェによる道徳批判の萌芽――」である。
③美と生理学と力への意志との関連をめぐる問題については、論文「身体化される美、美化される力――ニーチェにおけるヴァーグナー批判再考――」等で扱った。
(2)2008 年度：①健康という概念が医学・生理学の進歩によって規定されるものであるという既存の概念が覆され、また健康を画一的なものと捉える見方が人間の平等というドグマに侵されたものとして積極的に否定されるニーチェの主張が確認された。またキリスト教の光学によって文化的意図に侵されている同時代の健康概念を批判し、本来的な健康へと導こうとするニーチェの道程の意義と困難さについても本研究は示した。なお以上の研究成果を、ハイデガー研究会例会ならびに日本ショーペンハウアー協会主催第 9 回ニーチェ・セミナーにて発表した。
②エドゥアルト・フォン・ハルトマンにおける無意識の概念がニーチェの生理学的思索に与えた影響についての研究を開始した。その途中経過を、日本シェリング協会第 17 回大会にて発表し、主にハルトマンの『無意識の哲学』における無意識と感情の関係についての内在的理解に努めた。
最後に、ニーチェの生理学に関する研究は、当時活躍していたさまざまな生理学者との関係性を細かく読み解いていくことで、今後さらに発展する可能性を秘めており、なお研究の継続が必要であることを付言しておきたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）
(1)山本恵子「健康というアポリアへの問い――ニーチェにおける「心理学者」の光学を手がかりに――」、『ショーペンハウアー研究』別冊　ニーチェ特集号第 2 号、査読あり、2009 年出版予定

(2) 山本恵子「作品から芸術家へ――後期ニーチェ芸術論の射程――」、『フィロソフィア』第 95 号、査読なし、2008 年、21～39 頁

(3)山本恵子「身体化される美、美化される力――ニーチェにおけるヴァーグナー批判再考――」、『哲学世界』第 30 号、査読なし、2008 年、55～66 頁

(4) Keiko Yamamoto, Position of Physiology according to Nietzsche: From the

Perspective of Comparison with Psychology and Mechanics, In: *Aisthêsis: a Journal of Culture and Aesthetics*, No.1, 査読なし, 2007, p. 39 -p. 5

(5)山本恵子「「道徳の生理学」とは何か――中期ニーチェによる道徳批判の萌芽――」、『感性文化研究所紀要』第 3 号、査読なし、2007 年、(19)～(34)頁

〔学会発表〕（計５件）
(1)山本恵子「エドゥアルト・フォン・ハルトマンにおける「無意識」と「感情」の関係をめぐって」、日本シェリング協会、2008 年 10 月 5 日、弘前大学

(2)山本恵子「ニーチェにおける他者の問題――ツァラトゥストラはなぜ山を下りたのか――」、日本倫理学会、2008 年 10 月 4 日、筑波大学

(3)山本恵子「ニーチェにおける創造の問題」、日本宗教学会、2008 年 9 月 15 日、筑波大学

(4)山本恵子「文化機能としての健康――ニーチェが描く時代精神とその批判――」、日本ショーペンハウアー協会ニーチェ部会、2008 年 5 月 4 日、八王子セミナーハウス

(5)山本恵子「ニーチェにおける「健康」の概念をめぐって」、ハイデガー研究会、2008 年 4 月 27 日、法政大学

〔図書〕（計１件）
(1)山本恵子『ニーチェと生理学 ――「芸術の生理学」構想への道――』大学教育出版、2008 年、全 218 頁

６．研究組織
(1)研究代表者
山本　恵子　（YAMAMOTO　KEIKO）
早稲田大学・文学学術院・助教
研究者番号：70434248